河上肇記念会報

No. 8.
1979. 2.

〒530
大阪市北区梅ケ枝町一九九（星光ビル）
菅原法律事務所内　河上肇記念会
電話　（〇六）三六四―六七七一
振替口座　大阪　三一三一九五

昭和五十三年度総会報告

十一月十二日（日曜）、天気が心配されたが、大した雨にもならず、参会者八十名の多きをえ、過去最高の盛会であった。世話人代表住谷悦治氏の挨拶にはじまり、今日まで当会に対し種々ご援助をいただきながら、今回始めて総会にご出席下さった前京都府知事蟹川虎三氏の語る〝わが師河上肇先生の思い出〟を、感銘深く拝聴した。そのあと法要、更に参会者のうち二十四名の方々が、各々所感を披瀝され、本年の生誕百年にむけて、気運の盛上りを感じさせる総会となった。なお特筆すべきことは、京大河上祭実行委員会の学生諸君が、総会の準備、当日の司会を一切引受け、大奮斗されたことである。当会の発展のため、まことに心強く思う次第である。

わが師河上肇先生の思い出

蟹川虎三

いつも河上会の御通知に接しながら、ご無沙汰ばかり、久振りで皆様にお目に掛かる機会をえまして、大変幸せに存じます。来てみて非常に法然院も懐しい。それより一層河上先生を偲んで、思い深きに至るわけであります。

私は河上先生に接触した点、接点は三つあります。一つは河上先生からアダム・スミスの講義の事務引継ぎを受けて――どうも河上先生を希望した学生を、新米の蟹川がやるのは申訳けないというので、掲示を出して、どうか皆、随意のところへ変ってくれといったが、河上先生のお蔭だと思うのですが、殆んど分れる者がなく――講義をやったということです。

丁度三・一五の日に、私は神戸を発って、研究員として、海外に出たわけです。三・一五のことは、コロンボあたりの沖合で、名古屋よりの無線電信で知りました。何か京都大学に騒動があったと無線で入って、船長が心配して、京都大学の人は蟹川だけだから、一つ皆んなに話してくれということでしたが、出発してから、こちらは何にも知らないんで、船長の方が無線で知っているくらいなので、私は辞退しましたけれど、淡徳三郎君が私の住いの近所に住んでいまして、その朝手入れがあったと、出発の朝に聞いていましたので、どうせ学生が引っぱられたぐらいだろうと思っておりました。

第二は、この三・一五の日に、京都駅で私の娘を――赤い外套を着ているような、二つか三つだったと思うのですが――河上先生が抱いて、あやしてくれた。大体河上先生は子供をあまり好かないという当時の評判でしたが、私の娘をあやしてくれたんで、蟹川もアカなんだろうと、

その日に大体決まりました。世間の噂というものはそんなものです。それが第二の接点であります。

× × ×

第三は私が学部長のときに、先生がお亡りになり、大学から通知があって、すぐお宅へお見舞いに上りました。そのときの先生はもう何も言わない先生でした。三・一五までは河上先生と三木清君とか、違う系統としては田村徳治さんとか、佐々木惣一さんとかが、楽友会館に集って、剰余価値学説史の研究会をやっていました。そういうときに先生は非常に謙虚で、佐々木君どう思うか―ということで、佐々木さんは行政法で、剰余価値なんか解るはずはないのだが、佐々木さんにも話をされる。それから、最もファッショ的なといったら悪いけれど、そういう傾向をもった作田荘一先生もその研究会におられた。いろんな人がいましたけれど、せいぜい十人。楽友会館の第一号室で毎週一回、剰余価値学説史を読みながら勉強しました。私はその時分の先生の気持に敬服して、自分もそうなろうと思ってきたけれど、喧嘩ばかりして、知事のような俗業を二十八年もやるというような次第になりました。

森耕二郎という九州大学の教授で――残念ですが、病気で亡りましたが――剰余価値学説史のなかでリカードの研究をした人ですが、この人も河上先生の弟子。それから谷口吉彦――かれは理論をやるのに向かんという河上先生――今あの世で議論をしていると思いますが――そうかと云って仲々良く出来る人だし、商業経済学みたいなものをやれ。かれはどちらかというと、そういうものの方に向きました。河上先生は誰でも抱擁する。本当に痩せた方でしたけれど、抱擁力の強い人でした。この間亡った小島昌太郎先生、助教授のとき、論文を書いて、河上先生に相談しながら、直しくもらった。本庄栄治郎さんなんかも、日本経済史では大家ですけれど、やはり若い時には河上先生のお世話になった。でも段々河上先生がどうの、こうの云われるようになってから、横を向くような奴も出てきました。けれども先生は非常に謙虚に誰とでも相談に乗ってやる。私などは、保守反動の代表者である財部、山本という先生が指導者であったわけですが、そんなことにはこだわらず、君、アダム・スミスをやれよ、というようなことで、大学院からすぐ講師になって、アダム・スミスをやったようなわけです。

ところが、その河上先生と話して、Value in use（使用価値）と Value in exchange（交換価値）――アダム・スミスの価値論の出発点なんですが―その Value（価値）というのは一体何んだということとなんです。云い出したら河上先生、離さないんです。夜遅くまで研究室で、Valueそのものが何かを議論し、先生の教えを乞うたわけであります。ところが、いつのまにか、先生は私の言い分をとって、先生の「経済学大綱」に私の論文を引用しておられる。それほど先生は謙虚であり、非常に優しかった。私はそういう点で、京都大学にきたのは非常によかったと思っております。

× × ×

その京都大学へ来たのも、次のようなことからです。私は東大の三浦岬の実験所に、プランクトンの種類を見分けるために、顕微鏡を覗きに、約二週間ばかり行っておったとき、偶然、神田の岩波書店で―聖書と古本を並べ、それから「坊ちゃん」などの新刊書なども置いてあった―何の因縁もなく「近世経済思想史論」を買いました。それを読んだのが、三浦岬の実験所で、大正九年の五月です。

実験所でプランクトンをみながら、リカードなどの発展を読んでいるというのは、おかしいようですけれど、当時は海の生産力が、ただ自然の生産力だけではないのだということを、聞いていまして、「近世経済思想史論」を買って読んだわけです。そしたら急に河上先生本人の話を

聞いた方が確かだというように思いだして、五月にそれを読んで、九月に京大に入学したようなわけであります。それから昭和二十一年の二月末日まで、京大で勉強させてもらいました。その間、河上先生に非常にご厄介になりました。河上先生には、「近代経済思想史論」を読んだなんていうことは云いませんでしたが――。

河上先生が、一回生には学史をやり、田島錦治先生が原論をやるというように交替でしたが、丁度、私が「近世経済思想史論」を読んで、本物にぶつかってみたいと思った、その本物をみたわけです。実に先生の文章が語るように、和服を着られて、頭をかかえながら、左の手をまくり上げ、講義をされるのを今なお目に残っております。そして別に笑いもしなければ、笑わせもしない。しかし何か面白い。それは先生の一つの徳だと思うのですけれど、先生の話は、そういう点で、私などは、もう一部始終を書きとめたものです。そのノートをいまだに持っています。他のノートは皆、焼くかクズヤに売ってしまいましたが、「近世経済思想史論」とそのノートは、いまだに持っています。

× × ×

それから先生が代々木の方へ移られた時分、前と後に特高がついているというので、それじゃ行ってみようかというんで、東京では一番よいというパッカードの車を頼みまして、先生を訪ねたことがあります。奥様にも、お嬢さんの芳子さんにもお目に掛って、つい、その面白くなって、「先生は今でも、タバコを喫われておりますか」というと、「タバコはやっぱり好きだから、喫うよ」といわれるので、ポケットから、ドイツで買ってきたタバコを四つ出して、差上げたら、「そういうタバコは喫わない」といわれるのです。私が講師や助教授の頃に、先生がよく夕方になると、「タバコがなくなりましてね」と――先生は〝敷島〟というタバコを、折りカバンの中に一杯つめて、どっちが原稿なんだか、タバコなんだか分らない位に、カバンが膨んでいたが――私と森耕二郎の雑居房へ来られる。「タバコならいくらでもありますよ」とポケットから、ゴールデンバットを出すと、「そいつは私には禁物だ」ということでした。そしたら森が〝朝日〟という〝敷島〟と同じような吸口の付いているやつを、「先生これならどうです」というと、「これならなんとか間に合うだろう」と、二袋ばかり先生はポケットに入れて行かれた。私は外国へ行ってしまったけれど、先生はやっぱりゴールデンバットは反対なんだろうと思っていて、先生のためにドイツのタバコを、わざわざ残して持ってきたのに、それはいかんといわれる。食事が済んでから先生がタバコを喫うのをみたら、ゴールデンバットではないですか。先生が労働運動に抵身し、労働者の中で活動するためには、やっぱりゴールデンバットでなければいけない。ゴールデンバットは当時、大工の匂いがするといわれて、その変なタバコを先生の研究室で喫ってくれるなというぐらいであったのですが……。そういうふうに先生は正直な人でした。嫌いなものが、よく好きになったものだと、私は思うのですが、それは先生の日本の労働運動に対する情熱の現われだと思うのです。おそらく亡られるまで、ゴールデンバットを喫っておられただろうと思います。先生がタベ亡られたという朝に、学部長として、お宅へお見舞に上がった時、これが第三番目の先生との接点であります。それから今度は、先生の身替りになって、知事を二十八年間勤めてきました。

私はやはり、水産に止まらずに、京大へいって河上先生に習えたということは幸せであった。私は党員ではないから共産党だとは言われないけれど、マルクス主義者であることには変りはない。大学へ入ったときからマルクスを習ったんですから、三つ子の魂百までもです。八十才を越しても、やっぱりマルクスが愛人です。

× × ×

当時の京大は、河上先生がおられ、河田嗣郎先生がおられ、恒藤さんもおられ、法学部では同志社に一時いかれた田村徳治さんとか、かなり哲学的であった。皆んなで、いろいろ哲学的な話をするけれども、こっちは実学的なんで、価値論に終始したわけであります。それから段々、我々が河上先生に習い、河上先生に習った者の作った経済学部の空気というものが、三・一五以後変ってきました。

先生はよく弟子に騙かされましたが、それは人を信じすぎてです。おそらく今日のように、皆さん方が法然院に集われて、先生は本当に喜んでおられると思います。皆さんは騙かさない一味であるからです。騙かしたのが相当いるわけです。そういうふうに、先生は騙かされるほど、正直だったということです。そして非常に思いやりが深かった。たとえば、大学の構内で学生と会いますと、学生が角帽をとって、お辞儀をしたら、先生も必ずあの汚い――といったら失礼ですけれど――中折帽をとって、お辞儀をした学生の方を向いて挨拶をされた。そんな先生は当時もいませんでした。我々は非常に感銘を深くしたものです。

とにかく非常に正直で親切な人、よく人の世話もして、皆んな世話をしてもらって、方々に働きに行っていたものです。しかし、いざ先生がどうだといったら、寄りつかないといったのが多かったです。特に東京の代々木のお宅なんかには、余り行かなかった。私はそれで、先生のお嬢さんを、そっとしておいてもいかん、やっぱり女性なんだから、お嫁さんにいく必要があると思い、末川先生に相談しました。叔父さんが黙っているのに、他人の私がお嫁さんにいけというのはおかしいけれど、仲々良い縁がないという末川先生のお話。君引受けてくれるんなら、やってくれという話でした。それで私は河上先生のお嬢さんの芳子さんに、お婿さんを一人選定しまして、またバッカードに乗り、特高がウヨウヨしてましたが、モーニングなど着たこともなかったけれど、その時はわざと、ちゃんとモーニングを着て、正々堂々と先生の小さな家の玄関に横付けして、結納を持っていった記憶があります。

お婿さんの鈴木君が、刑務所におられる先生に会いに行く――あの奥様の日記に、この結び付きのことが書いてありますが――、しかしそこで、合格とも不合格とも云えませんし、後から大体合格ということでして、彼は満鉄に入りました。調査部に入る予定だったんですが、鉄道の方に入り、段々河上先生が世間の問題になるに従って、鈴木の嫁は河上の娘だというようなことから、ちょっと遠のけられるようになった。満鉄がそんなことでどうすると、いろいろ私も代弁に何度も行きました。

奥さんの芳子さんが二人のお嬢さんを抱いて、窓際に立って、今行く列車がお父さんの乗っている列車だと云って、子供達に教えた。私はそのお嬢さんに一度会おうと思っていますが、会う機会がありません。

芳子さんは非常によいお嬢さんでした。この頃テレビで沢村のお貞ちゃんが有名ですが、貞子さんが評判になるんなら、芳子さんも評判になるべき人でした。非常に物静かな、同じ日本女子大を途中で退学した人であります。芳子さんは到々敗戦直後に病気で亡くなられました。そして鈴木君をもう一度呼びもどそうという末川先生のお考えで、中国の方に交渉したら、返すという話で、その手続も全部完了したんですが、残念なことに、鈴木君病気になり、帰るチャンスがなくなって、中国で亡ってしまったわけです。このように私共は大学を出た後でも、いろいろと接触が多ったわけであります。

× × ×

この間自民党の府会議員が、一枚の写真を土産に持ってきた。ロンドンのマルクスの墓が、誰かに壊されて修理中で白い幕がかかっている。運転手にマルクスの墓に連れて行けと云っても、知らんと云う。労働者がマルクスを知らんというのは、何事だというのが、この府会議員の言

分です。それ程、河上先生が京都に残された思想的遺産は、非常に大きいと思います。

今の情勢からみると、どんどんインフレが進んでいます。いずれ恐慌がくるということも察しられる。やはり正しい経済理論をとらなければ、今の経済は駄目なんです。我々は河上先生が、我々に教えた人間としての生きる道 ―私は〝道は只一つ その道を行く春〟という俳句を作りましたが、これは資本論の扉にあるダンテの言葉、〝汝の道を進め 人々をその言うに任かせよ〟を、もじったんです―私はこれを信條として、皆さんとともに、先生の遺徳を偲ぶと同時に、先生の業績をさらに進めることこそ、今生きている我々の任務であると思います。（文責事務局）

新聞に載った総会出席者の感想

〔読売新聞 昭五三・一一・二三 読者の欄〝気流〟〕

〝河上肇の生き方学んでは……〟 田中米一

十二日に京都の法然院に会員七十人が参集し「河上肇記念会総会」が行われた。河上先生の没後、毎年の秋にこの寺で開かれるのは、ここに先生のお墓があるからである。会員は老人から若い学生といろいろで、大学の名誉教授からタクシーの運転手、主婦など職業もさまざま。思想的にも、右から左まで入りまじっている。

共通点はただ一つ。それは、先生がひたすら真摯に歩み続けたヒューマニズムと求道の姿に、深い感銘を受けている者ということである。「旅のちりはらいもあえぬ我ながら また新なる旅にたつかな」の一首が、先生の歩みをよく示していると思われる。

たまたま行楽に訪れた人が「ああ、河上先生の会か」と言っていたのが、きわめて印象的であった。政治も教育も文化も荒廃の道をたどっているように思われてならぬ昨今、特に若い人たちに、河上肇の研究をおすすめしたいものだ。

〔京都民報 昭五三・一一・二六 〝きょう言葉〟〕

〝法然院の墓地〟 塩田庄兵衛

京都に住んで、私が好きになった場所のひとつは鹿ケ谷の法然院である。かやぶきの山門をくぐると、白い盛砂と黒ずんだ池と紅葉との調和のとれた静かな庭に心が安らぐ。とくに面白いのは墓地である。考古学者・浜田青陵、中国学者・内藤湖南、哲学者・九鬼周造、作家・谷崎潤一郎、歌人・川田順、画家・福田平八郎・堂本印象などの学者・芸術家の、それぞれに個性的な墓碑が、山ふところの日だまりにひっそりと立ち並んでいる光景は味わいが深い。こんなところに眠ることができたら、死後がどんなに楽しいことかと時どき夢想する。

とりわけ私の足をこの墓地に引き寄せるのは、わが国のマルクス経済学研究の先達・河上肇先生の墓である。河上肇・夫人秀墓と刻まれた自然石の簡雅な墓標の横に、万葉仮名の大きな石碑が立っている。

たどりつきふりかえりみればやまかはを こえてはこえてきつるものかな と読める三十一文字は、先生が齢五十を過ぎて一九三二年に、当時非合法の日本共産党に入党したときの感慨だと、自叙伝に記されている。つい先月下旬にも、劇作家の木下順二さんを案内して墓前に額づいたばかりだが、また十一月十二日の日曜にここを訪れた。法然院の本堂につづく座敷で、恒例の河上肇記念会が催されたからである。

この日は、河上先生の令嬢羽村静子夫人をはじめ、先生の教えを直接受けた人びと、あるいは、私のように生ま身の先生は知らないが、敬愛の念をもつ者などが百人近くあつまった。地元ばかりでなく、東京や九

州からの参加者もあった。同志社前総長・住谷悦治先生はあいかわらず元気な姿を見せられたが、立命館前総長・末川博先生が義兄の河上先生のもとへ旅立ってしまわれたのが淋しいという嘆きがきかれた。

蟻川前京都府知事が、京都帝国大学経済学部で後輩の同僚であった立場から、河上肇先生の思い出を語られた。この記念講演は、私がこれまでたびたび聴いた陽気でしみじみした虎三ぶしのなかでも、特別にききごたえのある絶品であった。その内容が、文字になって多くの人の目にふれる機会を待ちたい。

京大河上祭を運営した学生諸君の若々しい司会で、出席者がそれぞれ河上先生と自分との因縁について短かいスピーチをした。そのなかで渡辺みとさんが、さいきんの反共攻撃のひどさを腹に据えかねて、八十一歳になって共産党に入党したと語って拍手を浴びた。

京都は古くて新しい都市だとよく言われるが、亡くなってすでに三十年以上になる河上先生が、多くのひとの心の中に生きて、その人生をはげましつづけていることに改めて感動した。来年は先生の生誕百周年にあたる。どのような記念行事が、河上でことを肇められたこの先達にふさわしいか、私たちの課題であろう。

会員諸氏のご意見を問う！

当会事務局において　左記のようなキャンペインを考慮中

ご意見　ご希望　是非事務局まで

〝河上肇生誕百年記念事業推進キャンペインについて〟

本年十月二十日は河上肇生誕百年にあたります。真理を求める求道者として、マルクス経済学者として、秀でた詩人として、すぐれた文章家として、革命家として、特に人間的魅力にみちみちた人格として、河上肇は、明治、大正、昭和に亘る我が国近代史上はもとより有史以来の比類のないユニークな存在であります。私共、東西の両会はその没後、河上肇を敬慕し、河上精神を現在に継承しようと微力を尽くして来た組織でありますが、生誕百年を期して記念事業を興し、ここに改めて河上肇のライフヒストリーをたどり、この一世紀を顧ることは極めて有意義であり、我が国の文運を前向きに推し進める所以であると考えます。この事業につき「河上肇キャンペイン」を企画、ここに貴殿にこのキャンペインにご参加、ご協力をお願いする次第であります。勿論、具体的な諸般の活動については、両会が献身する覚悟でありますが、未熟な我々の企図のために、忌憚のないご意見とお智恵を提供して頂ければ幸、これにすぎません。

キャンペインの期間は生誕記念日に向け、二月～十月初旬まで。

とりあえず我々の考えております事業は左記の通りであります。

記

一、十月二十日を中心に京都に於て京都大学経済学部河上文庫　京都府立総合資料館河上文庫、河上家その他特志の協力を得て、資料館楼上に於て「河上肇の業績と生涯」をテーマにした展示会（約十日間開催

一、展示会の期間に同講堂に於て記念講演会開催　（十月二十日土曜日午後の予定）

一、法然院に於て生誕百年記念式典と懇親会

一、生誕の地に記念碑を建立　（山口県岩国市）

一、岩波文庫「自叙傳」「貧乏物語」の生誕百年記念特装本の発行

一、両会に於て委員会を設けて、ライフヒストリーを編さん発行頒布（社会思想社、教養文庫）

一、河上肇記念賞の創設

一、京大河上祭との共同企画

一、東京に於ける各種行事

一、記念事業遂行に要する資金の勧進

河上肇とぼくらの世代

谷本英男

ぼくらは、「優しい世代」とも「シラケの世代」とも言われる。全くのところそうなのかもしれない。例えば、自分自身に質問してみよう。何故、大学に来て学ぶのか。本音を吐いてしまえば、よい企業に就職したいからである。（実際のところ、経済学などと言う学問は、就職にいくら強いと言ったところで、就職後、役に立って仕方がないなどと誰も思ってはいないのだ。適当に自分のしたい事をし、自分の読みたい本を読み、それで卒業させてもらえるから入った、これが本音の本音なのだから。）また、何故、一部の学生運動を興味を持ちながらも冷やかな目で見ることができるのか。それは、そんなことをしたら損だという概念が頭の中にあるからだ。これからの生活を考えると、共感を持ちながらも、就職は？親は？なんて気を回してしまう。

そう考えると、ぼくらの「優しさ」とは何なのだろう。言わば「敗者」の優しさなのであろう。「敗者」というのは、最初から、勝敗を投げ出しているのだ。何をやっても、既成の倫理観には勝てはしない。学生運動をしたところで、それは警官に対する悪い行為としか他人には映らないだろうし、団交をしたところで、ただ、だだをこねているようにしか受けとられない。だから勝ち目はない。そう思うことによって、ぼくらは、最初から逃げてしまっている。他人も敗者であることを悟って、まるで傷口をなめ合うような「優しさをいつのまにか身につけているのでは」ないだろうか。

「シラケ」でも同じ事が言える。ぼくらはちゃんとした倫理観を持っているのだ。しかし、それは他の世代とは、全く別の「善悪」に対する判断の仕方をもっているために、受け入れられるはずがなく、力の関係で、ぼくらの倫理観が排除されてしまうとき、ぼくらは「シラケ」てしまうのだ。

「善悪」の判断と書いた。ぼくらの中では「善悪」などありはしない。こう書くとちょっと誤解があるといけないから、具体的な例を上げる。ぼくは、ついこのあいだ、河上肇が「犯罪者」であることを知って、吃驚してしまった。いくら今は、悪法だと言われている「治安維持法」違反だと言ったところで、昭和二十年までの河上肇は、れっきとした前科者だったわけで、このことは誰も否定できないだろう。「アカ！アカ！」と言われた戦前の共産党員は、そのころの善良な人々にとっては、近所のヤクザより数十倍も恐ろしい人間であったことは想像できそうな気がする。何のかんのいったところで、戦前の大多数の人々にとって、「天皇万歳」は、疑うことのできない当然性があったろうし、たとえ少数だとは言え「お国の為に死ぬ」ことが本望だった人々もいるにはいたであろう。（今でなら何とでも言える。友人が父親に「どうして徴兵だけでも忌避しなかったのか」と聞いたら、父親の方は「その時代に生きていないお前には、絶対にわからない。」と言ったそうだ。）

つまり、「善悪」の客観性などというものは、絶対にあり得ないということである。時代によってこれほどまでに違ってくる「善悪」というものなど、ぼくらは、全く信じられないのである。だから、ぼくらの倫理観の中心は、自分の正しいか否かの認識を、自分自身が行なわなければならない、という点にあるわけだ。（そういった点では、暴走族の気持ちもわかるような気がする。彼らの、自分を正しいと思ってない点だけは、批判されてもいいけれど、ただ新聞の「悪い」と一方的にきめつ

けてしまうような書き方は、ぼくには、倫理観の押しつけのような気がして、少しばかり辟易してしまうようなところがある。）

そうだから、河上肇に対してぼくらは（〝ぼくら〟という言葉が良くないと思うなら、〝ぼくは〟と言い変えてもいいが）ある種の共感を持ってしまう。あれほど、自己の思想の正しさを自分で認識し、メチャクチャと言っていいほどまでに、その思想を実践し得たと言うこと、それだけで、ぼくらは、深く共感してしまうのだ。ぼくらは、自分の正しさを認識しながら、なおそれを実行できずに、「優しき」とか「シラケ」に逃げてしまっているのに、何故だろう、河上肇は実践している！

だから（と言うのもおかしないい方だが）河上肇が、共産党員だったとか、マルクス主義の紹介者であったとかいうことは、実は、どうでもよいとなのだ。（より知るためには、マルクス主義を知っておかなければ、だめだとも思うけれども。）

ためしに、彼の年譜でも開いてみよう。河上肇の自叙伝には、こんな記事が出ている。「党の要求は次第に逓増して来て、約束の定期寄付金の月額を殖したばかりではなく、千円、二千円と纏った臨時の寄付をせねばならぬ場合が何回か重なってゐた。その度毎に家内は銀行の預金を引き出して来た」（昭和七年）。このころの千円、二千円など、目のとび出るような金なのに、その次の九月には、一万五千円のカンパをしている。まったく、あきれてしまう。それなのに、その行為自体をできたということは、また素晴しいのだ。自分の信念にこれだけ忠実になり得るものだろうか。こんな記事もある。「満足に思うと同時に『しかし後にはどれほどの金が残してあるのだろう』と、家内の今後の生活のことがひどく気に懸った」。

この夏に河上肇は、共産党に入党している。この時あの有名な「たどりつき　ふりかえり見れば　山川を　とえてはとえて　きつるものかな」という歌を詠んでいる。しかし、この年は、大森ギャング事件の年でもあるのだ。実際のところを言えば、ぼくは、この当時の共産党は、たいした組織を持っていなかったと思っているし、頭でっかちであったとも思っている。しかし、河上は、自分の意志で、現状を悪と認識し、それに対抗する手段として入党したのであろう。卒直に言えば、アホ呼ばわりもできるだろう。でも、何となく共感できるのである。

そして、昭和八年一月河上は逮捕される。六月の佐野学、鍋山貞親の転向声明の後、七月六日に、河上も「転向」声明を行なう。「獄中独語」には、こんなことが書いてある。「マルクス主義を信奉するというだけでは、マルクス主義者でも共産主義者でもあり得ないのだ。……共産主義者たる資格を自ら放棄することは、共産主義者としての自刃である」と書き、最後は、こう結んでいる。「この一文を以て自らを葬る弔詞となす」。

なんて格好がいいのだろう。特に最後がいい、なんて言うことは簡単だが、あの転向のなだれの中で、最後の最後まで、マルクス主義に、固執できたということを考えねばならないだろう。

人間は、こんなに実践できるのだ。ぼくらは、「諦める」ことによって、その倫理観を殺してきたつもりだった。しかし、未だ共感できるではないか。当時一万円の金をポンと党に出せたという行為を、バカだなァと思いつつも、その一方で素晴しいと思えるのだ。最後まで、みっともなく（きっぱは格好いいと書いたじゃないかと言われそうだが）マルクス主義にしがみついたことに、感動できたことは確かである。

「優しい」世代のぼくらも、何か出来るのだろう。自叙伝の中では、食べ物の話ばかりし、自分の娘まで活動にまき込み、マルクスの書物を（語句的にだけれども）間違えて訳している河上肇に、これだけ興味が持てるのだから。（筆者　京大河上祭実行委員　経済学部二回生）

〔会員投書（1）〕

若い人達と河上先生について語ろう！

いつも会報を送っていただき、ありがとうございます。久振りに京都を散策の折、法然院で河上先生のお墓を発見し、京都で過した学生時代の日々が、あらためて懐しく思い出され、墓前の竹筒に名刺を入れて、その場を去ったのは、もう三年前の秋のことでした。早速、丁重な御礼状を河上肇記念会よりいただき、恐縮いたしました。

三年前のことを思い出しながら、今度はじめて、総会に出席させていただきました。蟻川さんはじめ、たくさん名士の方々が一杯の会場、さすが河上先生は偉いもんだナと思いました。私などは肩身の狭い思いで、皆さんのおっしゃることを、聴くばかりでありましたが、河上先生を本当に敬愛し、御自分の生き方のいましめとしておられるのが、よく分り、私には大変感銘深い一時でありました。

しかし、心の洗われるような、こんな思いと同時に、一種の危惧も感じざるをえませんでした。それは、お見受けいたしましたところ、余りにも御年配の方が多く、司会や会場のお世話をしておられたのは京大の学生さん達ではありましたが、どうもこの会は明治の方々のものだナと思ったことです。こんなことを云っては失礼かも知れませんが、このままであれば、先は心細いのではないでしょうか。大学の先生方も、たくさんみえておられたようですし、私ごときものよりも、数十倍も数百倍も、社会に対する大きな影響力をお持ちの方々ばかりなのですから、総会でお話しになったようなことを、是非多くの若い人達に、くりかえし語っていただきたいと思います。昭和一ケタ生れの私も、職場や近所の若者達と、人間の生き方の問題として、河上先生のことを話していくつもりであります。……（後　略）……

〔会員投書（2）〕

百年祭の運営はオープンに願います

いよいよ百年祭の年が来ましたね。事務局の方々の御苦労も大変だと思います。百年祭は河上さんを讃仰して努力目標とする人、彼を一つのステップとして更に発展を求める人々等の大きな輪を拡げ、一大運動に盛上げて行きたいものですね。それにしても、会報6号、7号を読んでおりますと、百年祭を進める上で、何かしら、陰湿で、不可解な動きがあるような印象を受けます。特定個人の意向に合致するとかしないとか、それに対して、個人が、どんな内容かも会員には知らされぬ文書を出し決着をつけよう等とするのは、勿論、会の運営をスムーズにする為の、善意から出た事でしょうが、会員無視も甚だしい行為と考えます。

密室交渉が日本のすべての集団を侵すとしても、河上肇記念会だけは『正直』であった河上さんの精神を受継いだ運営であって欲しいと思います。一体、どんな所が大きな輪を作って、統一的な、輝かしい百年祭への動きの障碍になっているのか？一会員に過ぎない私なぞにはさっぱりわかりません。『いろいろむずかしい事もあろうから……』と、なんとなく解ったような顔をして、長い物に巻かれているという事は河上さんのやり方の反対のものに思えます。そんな顔をしていなければならないのなら、私は直に河上肇記念会を脱会させていただきます。

決して事務局の方々を非難するつもりで書いているのではありません。事務局の都合で、この原稿はボツになるかも知れませんが、百年祭の、成功を願い、貧者の一灯を捧げたいと思っている市井の一庶民として、河上さんを冒瀆するような運営方法は一日も早く清算していただきたいと思い筆を取りました。失礼の段、御海容のほどお願いします。

〔図書案内〕

◆「生涯一野人—服部周平追悼録—」　追想・服部周平偲ぶ会

河上の末裔が、また一人逝く。野人をもって自ら任じた伊勢の草莽。その同僚、知人が綴る哀悼の書。故人自ら語る〝大陸残照〟に面目躍如。故人は旧制四高、京大経、河上先生に学ぶ。享年七十才。希望者事務局まで。

◆宇都宮徳馬「アジアに立つ」　講談社　一、二〇〇円

著者は学生時代、河上先生に私淑。自民党離党、現在無所属。戦後三十年間一貫して日・中・米間の国交正常化に奔走してきた戦斗的リベラリストの政治外交論集。そして魂の記録。

◆田中文蔵「河上肇研究の一側面」　二、〇〇〇円（送料共）

著者は十年間にわたり東京河上会々報の編集、発行を続けられた。そのことのすべてが、この著作の中味である。昭和七年京大経卒。希望者は、横浜市戸塚区小雀町二一四八—二五　著者宛申込まれたし。

◎当番日記

◆十一月十二日法然院の総会には蟷川先生を迎えて、誠に結構な充実したお話を承る事が出来、且つ会へも先生から寄付を頂戴。心から御礼申し上げる。出席の方々からも興味ある寸話を頂戴、極めて盛会、実りのある会になったのは幸であった。遥々九州から参加の麻生夫妻、東京横浜からの田中文蔵、野口務、清水重男の諸君からわざわざ感想文を頂き、又岡崎から初めて出席された安藤重次氏は、十二月三日付東海愛知新聞に「河上肇と法然院」と題する記念会紹介の投稿の切抜を送って下さった。因に同氏は昨年末川清氏の紹介で入会、京大の先輩で河上研究家の一人である。

◆総会席上、河上謹一氏の詩本を紹介して下さった一海知義氏から「図書」七八年十二月号所載「漢詩とエロス——河上肇の場合——」の抜刷を頂いた。五十八才の老囚の夢に残る「舞子の白き足袋」、六十三才の漢詩「途上所見」、「声色の欲はすでに絶えたれど」云々の歌。先生の齢をすでに越えた小生など省みて思半ばにすぎるものがある。とまれ一海氏によってさきの岩波新書「河上肇詩注」初め次々と詩人河上肇の研究や、又時々の逸話を紹介されて行くのは、まことにありがたい事である。筆硯益々健かならん事を。

◆竜谷大学社会科学研究所の森竜吉先生から「河上肇と無我愛運動」と題する同所年報第九号の抜刷を頂戴した。緻密な研究であって、さきに小西輝夫氏から頂いた「河上肇の奇異なる体験について」（神戸大学医学部紀要三四—三）と共に、今迄看過され勝ちであった方面の研究がなされて、先生のライフヒストリーが充実されつつある事は、誠に結構なことである。これにつけても考えられるのは、「自叙伝」の鎖末に亘る研究は極めて興味深い意義ある仕事ではないだろうか。

◆雑誌「世界」二月号巻頭の住谷一彦氏の論文「捕囚の思想」は注目すべき文章で、生誕百年記念事業を企図しつつある我々には、特に——河上肇生誕百年によせて——の副題がありがたい。河上肇の思想と学問と生涯が今日もなお、「知るに値する」が故に今なお研究される所以について、私共の法然院の墓前の名刺受物語を縷々紹介して下さったのは、河上肇記念会としては感謝にたえず、法然院の墓の案内に任じておられる住谷悦治先生を思い、名刺受を進んで作って下さった人々、又黙々として永年この名刺受を守って一々御礼状を出してくれている安井功氏を特記しておき度い。

【編集後記】大変遅くなって申訳けない。他に頂いた原稿、投書もありながら、誌面＝財政の都合で、次号にまわさざるをえなかった。（赤）